

パネルディスカッション



コーディネーター紹介

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。文学博士。専門は日本古代史。

パネラー

井上 和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

榎本 淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

松川 博一（九州歴史資料館学芸研究班長・学芸員）

西住 欣一郎（歴史公園鞠智城・温故創生館長）

佐藤..

今日はたいへん充実した講演・報告を聞かせていただきまして、ありがとうございました。これから約六〇分程ですが、ディスカッションをしたいと思います。

最初に大きな章立てを考えますと、一つは、最初の井上さんのご講演が多岐にわたるもので、最後に時間が少々足りなかったこともありますので、少し補っていただきまして、それに関連して、他のパネリストの方々のご意見を少し伺います。その後、本日の本題は「鞠智城の終焉と平安社会」ということですので、平安時代における鞠智城の存在意義あるいは機能について、議論を深めるというのが二番目の章になります。第三には、これからの鞠智城の調査研究について、どのような課題が本日のシンポジウムを踏まえてあり得るだろうかということを議論したいと思います。

まずはじめに、井上さんのご講演は随分多岐にわたるもので、古代山城論の全体に関わる内容にわたったわけですが、最後に十分な時間が取れなかったということもありますので、それをまず簡潔に補っていただいて、その後、それに関連したディスカッションをしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

井上.. どうもありがとうございます。五分ほど時間をいただきましたので、

その時間を利用して少し伝え足りなかったことを時間の限りお話させていただければと思います。

古代山城の歴史も、当然のことながら、大きな世界の歴史の中で捉えていかなければいけません。

これは榎本さんも盛んに強調されていましたけれども、当時の国際関係の中でこそ、日本の歴史というものを見据えていかなければいけないと思います。私の話の最後のところで、日本列島中央集権国家と申しました。この日本列島中央集権国家は日本国です。この国家体制は実は今日の、もっと端的に言えば明治維新の国家体制とほとんどイコールなのです。日本列島に汎列島の統一国家が生まれました。これは日本の歴史、七世紀以前にはなかったことなのです。

そのきっかけは何かというと、中国大陆で、四〇〇年間分裂抗争の時代に終止符を打ったのが隋帝国です。六八九年に南北朝を統一して、隋帝国を樹立しました。隋帝国は国内を統一するやいなや周辺諸国に対して、征服戦争を始めるのです。これは先ほどもいいました、華夷秩序の構築を目指したものであったのです。隋は少しそれが度を過ぎまして、わずか二八年で滅びます。

六一八年に後を継いだのが唐帝国。唐も一〇年間は国内の騒乱を抑えなければいけなかった。その天下平定が達成されたのが、六二八年のことです。日本列島はそれに対してどう行動したかという、六三〇年、それまで広やかな大和盆地にあった都を、飛鳥の谷の一番奥まった所に避難させたのです。そのことに象徴されるように日本の国家、統一国家というのがなぜ生まれたのかというと、その理由はひとえに、中国大陆での統一国家の樹立と非常に密接な関わりがあるということを知らなければな

らないでしょう。

唐は百済を攻める前にも、西域にあった諸国を次から次に征服戦争を通じて滅ぼし服属させるのです。そういう歴史があった上で、唐は新羅の要請に応じて百済を侵略します。百済を攻めた時点での唐の軍隊というのは、西域での戦いに手練れた兵士たちであり、それが朝鮮半島になだれ込んだという、そういう状況を踏まえなければ、当時の日本列島の人々の危機感が、はつきりつかめないのかもしれない。

そういうわけで日本列島中央集権国家の構築が天武朝期に進むと私は考えています。その一応の完成は七〇一年の大宝律令に示されますが、この中央集権国家はひとえに国防国家だったのです。外国の侵略から日本を守るための国家、統一国家を作る、これがすべてであつたと思うのです。まさに明治政府が欧米列強から、この日本列島を守るために構築されたのと同じ動因であつたということを知らなければならないと思うのです。

その唐、日本を侵略しようとした唐は、奈良時代の中頃、もうすでに国家の土台が揺らぎはじめます。ですから、日本も統一国家を作つてがっちり固まっていなくても良いような、そういう国際環境になる。それが、榎本さんのおっしゃられた奈良時代後半から平安時代にかけてのさまざまな状況なのです。九世紀になりますと、日本では国家レベルの軍隊がなくなります。一〇世紀に至ると、鞠智城がなくなるわけですが、一〇世紀がどういう時期かといいますと、一〇世紀の初頭に唐帝国が減び

るのです。そうしますと、日本ももう国一つにまとまって、海外からの脅威に対応する必要がなくなるという国際情勢になる。そうした東アジア、さらには世界全体の歴史の中で日本の歴史を見ていく。そうすることによって、より古代山城の意味も鮮明になってくると思うのです。

鞠智城については、また少し意見を述べたいと思います。

佐藤..

それでは、最初に井上さんのご講演に関連して、他のパネラーの方たちに何か質問とか、こういう考え方もあるのではないかというようなことがあれば、一言ずついただきたいと思うのですが。榎本さん、いかがでしょうか。

榎本..

井上さんのお話は大変刺激的なお話で、大変勉強になりました。私も最後のほうで鞠智城の特殊性というものをもとに存続の理由を考えたのですが、井上さんは鞠智城の特性を築城の時期の問題として捉えられていたということで、大変啓発されました。鞠智城が他の山城と違った多くの特徴を持っている、機能を持っているということは、やはりそれはその築城したときの目的に大変密接につながっているものだというふうに、私も理解します。なぜあんなにいろいろ他の山城と違った機能や、特殊性を持って鞠智城が造られたのか。そのあたり、井上さんのお話をもとに、今後はいろいろ検討していかなければならないかと痛感した次第です。

井上..

先ほどの続きです。まさに鞠智城は内部に広い平坦地が設定されている。ですから鞠智城は使い勝手がいいのです。五十嵐基善さんが鞠智城の研究のご論文の中で「そこにあったから鞠智城を使ったのだ」と述べていますが、まさにそうだと思います。それほどの平坦地を備えた山城は他にはありません。

もう少し詳細に見ますと、あと二つ、一番高いところに平坦地がある山岳型山城があります。一つは福岡県糸島市の雷山城。これは玄界灘を見下ろす標高五〇〇メートルほどの高みにある山城ですが、山頂部に若干の平坦地がある。鞠智城ほどの広さはありませんが、兵士が常駐するためのものとみられます。玄界灘を渡海してくる敵の艦隊、唐の侵略軍の出現を見張っている、そういう機能を備えた山城だったと思います。

もう一つは、高松市の屋嶋城です。山頂部分に細長い平坦地がある。瀬戸内海に突出した立地条件を生かして、西から敵の艦隊が接近してくるときにいち早く確認して、烽火（のろし）で次々に情報を中央に伝達していく。ですから、今後、それぞれの山城を、より正当な鑑識眼で見えていくと、まだまださまざまな発見があり得ると思っています。

佐藤..

私も本日の上井さんのご講演を聞きまして、軍略というのでしょうか、そこからそれぞれの古代の

山城を捉えるという点。特に、例えば敗北した際に兵士たちをもう一遍再編成するためという山城の機能まで考えておられるのが、新しいなと思いました。

山城無益論みたいなお話があったわけですが、私なども、百済ではあまり機能しなかったのではないかとということが前提だったと思うのですが、私などは、例えば隋の時代に隋の皇帝が三度も高句麗に大軍で押し寄せたのですが、これは三度も、高句麗は平壤城に立て籠もって、山城を機能させて追いつ返してしまう。それが原因になって隋が滅ぶということになっていくわけで、私は、やはり山城はそんなに無益ではないのではないかという考え方も、あり得ると思っています。

唐の場合は、隋の失敗を知っておりますので、新羅と同盟を結んで攻めたというのが、全然隋とは違うものと私は思っているのですが、その点は井上さんはどう思われますか。

井上..

ただ、百済を攻めた唐が、わずか一〇日ほどの間に国内を蹂躪して、都を陥落させたという事実は非常に重大だと思うのです。

それから、もう一つ、鞠智城について、熊本県による研究助成事業で研究をされた近藤浩一さんの論文によると、滅亡した百済の地に唐の軍隊が進駐するのですが、その進駐本部である熊津都督府の側では日本列島の山城というのはほとんど脅威に感じていなかったという、そういう研究成果を発表されています。私は、それは正当な見解だと思います。ただ、日本側はそれでもなお防衛軍事的に必

要なのだ、有益なのだという思いを込めて懸命に造ったことは間違いないだろうと思うのです。ただ、客観的に見ると、軍事的には、ほとんど役に立たなかったのではないかと思います。

幸いにも唐の大軍が日本列島を侵略することは、いろいろな歴史的経緯があり、避けられました。ですから、それを本当に有益であったか、無益であったかは立証できないのですが、客観的に見て、やはり古代山城というのは唐の強大な軍勢力、大海戦術の大軍の前ではほとんど意味がなかったのではないだろうかというのが、私の評価といえますか、理解なのです。

佐藤..

それから、井上さんのご講演でもう一つ。天智朝における山城政策と天武朝における中央集権化政策を極めて対比的に扱われて、天武朝ではもう山城は基本的には造らないし、機能しないし、廃棄されていくというお考えのように受け止めたのですけれども、その辺の天武朝になって以降の、例えば九州の山城の在り方が少し気になります。それから、もう一点は、井上さんの話の中では、大宰府を守るために大野城、基肄城、阿志岐山城などを配置したのではないということも言われたのですが、その辺については、大宰府の調査研究に当たっておられる松川さん、先ほどの天智朝・天武朝における山城の位置づけも含めて、ご意見を伺いたいのですが。

松川..

現在も九州歴史資料館では大宰府史跡の発掘調査を行い、大宰府の調査研究に日夜努めています。

その上で一般的には白村江の戦いの以前においては、筑紫大宰は水城の外、博多側におりまして、白村江の戦いを境にして内側に、つまり、敗戦を境にして現在の太宰府の地に移って来たというのが、通説的な考え方になっています。それに併せて水城についても外堀と土塁を設け、そして、北と南に山城を置いて、逃げ込み式の山城をというように理解されています。これまで私としてもそのように理解していたのですが、井上さんのお話ですと、その平野部に敵をむしろ袋のネズミのような所に誘い込んで、そこで撃退をするという戦法であったというようなご推察をされてらっしゃいます。

今、大宰府政庁跡のⅠ期の位置づけをどのように考えたらいいのか、あるいは大宰府の成立論をどう考えたらいいのかということを、来年は発掘調査の開始から50周年を迎えますので、それに向けて今考えているところです。戦略といった視点というのも、今後考える必要があるのかとも思いました。

ただ、現在大宰府政庁がある太宰府の場所といますのは、交通の要所の地でもありまして、九州全域内陸に入っていく際には現在も高速が通っていたり、あるいは、西鉄、それからJRといった路線が必ず大宰府を通っていくという、そういった交通の要所でもある。そこは軍事的にも重要な場所ということ、そこに大宰府が置かれたというふうに、私などは今考えているところです。

天智朝までは確かに危機として、例えば対馬とか、壱岐とかに外国の船が来たというようなときには、そのときにも知らせが来て、それに備え臨戦体制に入るといような段階ですが、天武朝になりますと国際関係も中国の使節、あるいは、新羅の使節が来るというような状況で、山城自体の

位置づけも井上さんがおっしゃるようにならななと考えています。その中で大野城・基肄城・鞠智城は、まさに敵が攻めてくるということへの対応というより、その中に備蓄する兵器や穀物類、いざとなれば兵糧になるのかもしれないけれども、そういった備蓄基地的な役割にならななたのではないかと、私は考えているところではなな。

井上 ..

大宰府が今の位置に置かれるのは、私は天武朝、あるいは、それ以降だと思っています。天智朝、中大兄皇子の時期に、大宰府があな場所にななされたのかどうかということが問題です。発掘調査では大宰府のⅠ-Ⅰ期の建物は確かにあります。しかし、それは本当に大宰府の施設だったのか。すぐ近くに水城という壮大な軍事施設があります。その水城を維持するために、防人を中心とした兵士が何百人か、何千人か駐屯したでしょう。そういう人たちのための施設であなな可能性だてあるのです。そういうふうになな、何といひますか、歴史はもつと柔軟に考えなければいけななと思うのです。ですから、ほんの数年の差であなても、天智朝と天武朝、ほんの数年の差ですけれども、そこに大きな歴史のななかれ目があるということも、歴史を考える上で忘れてはいけななせん。大きな流れの中ですこしずつ動くのではなくて、あるときを境目にななしてがらつと変わることだてて、歴史としては実際にあり得たわけではなな。

そのように柔軟に考えますと、何よりも大野城・基肄城・阿志岐城が大宰府を守るものであななたと

すれば、筑後平野の山城は一体何だったのか、鞠智城はさらに何だったのか、瀬戸内海沿岸の山城は何だったのか。これらを一体的にどう理解するかということ、その答えを準備しなければ反論になりません。全体をどのような軍略のもとでの軍事施設として位置づけるかということ、こういう視点が従来かなり欠けていたと思うのです。

本当に命がけの国家間の戦争なのです。その中でいい加減に山城を造るということを考えてはいけません。生き死にを賭けた戦争として、どう位置づけるかということが大事なことなのではないかと思っています。もしそれがたとえば単なる記念物として造ったというなら、それはそれで一つの意見ですが、私は決してそういう見解は取りませんし、そうではありえないと判断しています。

佐藤..

それでは、本日の井上さんのお話の中で、鞠智城の役割としての軍略の指摘がありました。古代の山城の中で三つ目のパターン、第三の意味がある山城だという位置づけがあったわけです。これまで鞠智城を調査されてきた西住さん、鞠智城の特徴について、あらためてお話ししていただけないでしょうか。

西住..

やはり井上さんが設定されました第三の類型という、私も報告の中で述べさせていただきましたけれども、鞠智城は山城という割に標高が一四〇メートルぐらいの所ですけれども、非常に平坦な場所

が確保されているということは、そこに建物がたくさん建てられるということになります。傾斜地、斜面で平坦面がなければあまり建物は建てられないのですが、とても広い面が確保されているということで、約三〇〇年間の間に、現在熊本県教育委員会のほうで把握している七二棟の建物が確認されています。

それら建物の評価を、私たちはまだきちんとできていないのですけれども、本日先生のお話の中で、第三の類型という新たな視点で見ることで、最後に先生がまとめのところで言われていたと思うのですが、戦いのときの最後の砦としての逃げ込む場というのは今まで想定していなかったのですけれども、そういうものも含めながら今後調査研究のほうを進めなければいけないと、改めて感じたところです。

佐藤

七世紀の鞠智城がすぐく活動していた時期が、出土した土器から第Ⅱ期ということなのですが、それは一応七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期にかけてといわれているのですよね。その場合の第4四半期というのは、『続日本紀』に繕治の記事のある六九八年からのことを言っているのか、もう少し前の第4四半期、六七六年からが第4四半期となるのですけれども、今問題になっている天武朝辺りにさかのぼって、そのころの土器もたくさん出土しているのか、という点はいかがでしょうか。

西住・・

私の資料の第八図（資料編9頁）というところに出土遺物の量の変化を示しておりますけれども、佐藤さんがおっしゃったのは七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期に棒グラフがきちんとぐんと伸びておりまして、実は私どもこれはちょうどこの時期が文献に出てきます大野城・基肆城・鞠智城で三つのお城を修理したという記述が出てきますけれども、それに関連してたくさん人が居たのではないかなということを考えております。

佐藤・・

分かりました。それでは、本日の主題であります「鞠智城の終焉と平安社会」のテーマに移らせていただきたいと思います。これについては、榎本さんのご報告、あるいは、松川さんのご報告がありました。お二人のご報告でリンクするところ、同じ史料を使われたところもありますので、お一人ずつ、本日のご講演・報告すべてを聞いた上で、ご自分の意見について、もう一度整理してお話していただけないでしょうか。榎本さんからお願いたします。

榎本・・

松川さんも含めて文献研究の先生方は、九世紀の対外危機が鞠智城の存続の一つの理由として説明されることが多いのですが、私は先ほど申し上げたように九世紀の対外危機の実態を考えた場合、七世紀後半に鞠智城が造られたときと同じような、国土が侵略されるような危機というふうには、捉えられていなかったのではないかと。山城を必要とするような状況ではなかったのではないかというこ

とが、一つの理由です。

それから、もう一つは対外危機として海賊の脅威が高まっていったわけですが、肥後国が全くそれと無関係というつもりはありませんが、弩師の配置などを見ると他の地域に比べると遅い。一番遅いということで、相対的に対外的な危機がそれほど高くない。そういうところに鞠智城だけ存続するということは、これはおかしいのではないかと。対外的危機で鞠智城が存続するというのであれば、もっと対外的危機の高いところのほうの山城こそ残ってしかるべきなのに残っていないわけですから、そういう二つの理由で対外危機と鞠智城の存続を結びつけるのは、これは少し理解できないのではないかとということが、大きな趣旨としてお話させていただいたことがあります。

松川さんのお話は具体的ないろいろな最新の発掘情報とか、深い資料の読み込みなどがされていて、なるほどというふうに教えられたところが大変多いわけで、そういう意味で対外危機が全くなかったということは言うつもりはありませんけれども、相対的に肥後国の場合は対外危機が低かったと考えられています。しかし、全く松川さんの説と矛盾するものではないと自分なりには理解しています。

佐藤・・ 松川さんのほうはいかがでしょうか。

松川・・ 私のほうも榎本さんのお話をお聞きしまして、東アジア的な視点で当時の国際環境の中で新羅が実

際攻めてくるような危険性はないということはよく理解させていただきました。実際新羅が攻めてくるというようなことは、当時の貴族たちのほうもどこまで意識していたのか。むしろ、新羅海賊がたびたび日本の九州沿岸を脅かすといったこと、それと私が強調させていただいたのは、そういった新羅海賊の脅威と、併せていつもセットになっているのが疫病なのです。

疫病でよくいわれますのは、天平時代がそうだけれども、遣新羅使が疫病を持ち込んできて、そして全国にまん延して、藤原四子が亡くなったというようなことが起きています。そういった疫病が新羅からもたらされるものという意識、また、それが四天王寺が建てられたときの目的もそうですけれども、新羅がどうも直接攻めてくることはないけれども、呪詛をしているのではないかと、そういった意識。どちらかというと観念的な意識、そういったものへの危機感に対して、当時の人々がどう対応していくかといったときに、それが顕著に表れる場所というのが山城であったり、あるいは、大宰府であったり、あるいは、沿岸部であれば大宰府の近くであります筑前志摩郡のような沿岸部にそういったことが表れて、それに対して現実的に軍備の増強であったり、また、神仏への祈りを通してそれに対抗していくという。疫病と新羅海賊への脅威、それと軍備の増強と神仏への祈りというのが、セットとして記事の中で現れてくるということです。それに対応する実際の山城の中の構造物として、兵庫があり、不動倉があるという、そういったお話を本日はさせていただきました。

佐藤・・

松川さんの話の中では、九世紀の新羅との緊張のもと、新羅の海賊が活躍した時代に、神仏への祈りで四王寺が建てられたり、四天王を祀ったりしている。そういった形で大野城においても、先ほど榎本さんのお話にあったように、軍事的な機能というよりは、八世紀後半に四王寺が置かれて機能し、神仏への祈りで外敵を、あるいは疫病を退散させる、侵入を許さないというような動きがあった。私は、そういうことは七～八世紀にもあっていいと思っっているのですが。

そういう目で見たときに、例えば鞠智城では七世紀には百済系の小金銅仏が出土しているということもあって、恐らく神仏の仏のほうですけれども、その仏教的な守りと古代山城とがつながるかと思うのですが。九世紀代の鞠智城における、そういう神仏との関係みたいなことは、何か遺跡の上では調査成果というのはあるのでしょうか、西住さん。

西住・・

佐藤さんがおっしゃったのは、私の資料の写真2（資料編3頁）というところに百済系銅造菩薩立像という写真を載せています。これは非常に小さな仏像で一三センチ、手に持てるような持仏です。これは確かに仏教関係の百済系の仏像ということなのですが、その九世紀以降にそういう仏教的なものというのは、現在確認ができておりません。ただ、松尾神社という神社が大同年間に勧進されます。松尾神社ですので、秦氏の酒造りで有名な京都の松尾大社が本社ですけれども、その分社が鞠智城のすぐ近くにあるという、それぐらいです、今のところ分かっているのは。ただ、今後調査が進めば大

野城と同じように、そういうのが出てくる可能性も全然ないわけではないと思います。

井上..

小さな可愛らしい百済仏ですが、これを過大評価すべきではないと思います。鞠智城の造営にも、当然ながら百済の亡命人が関与していると考えられます。六六〇年、あるいは、六六三年の戦争の後、何百、何千という百済の知識人、軍人、政治家たちが日本に亡命してきています。『日本書紀』では帰化人と呼ばれていますが、そういう人たちの力を借りて、二二の山城の築造が進められたことは、間違いのないところです。

六七一年、天智天皇が死ぬ半年ほど前には、功績のあった百済人たちに対して、天皇は高い位を贈り、その功績に応えています。要するに鞠智城を造るときにも、少なからぬ百済人が滞在しており、彼らは日々仏像に拝礼していたのかもしれませんが。そういう人たちの持物であったという可能性もまだ残されています。ですから、小仏像一つをもって、過小評価してもいけません、鞠智城全体の、あるいは、日本国家全体の戦争の勝利への加護を望んだというふうに言い切ってしまうていいのかどうか。いくつかの選択肢は残すべきだと思うのです。

それから、もう一つだけ。蛇足かもしれませんが、筑後平野周辺の幾つかの山城がある。これは斉明帝のときに造られたという説があるということは紹介いたしましたけれども、先ほどこれが当たらないということも申し上げました。

もう一つ、鞠智城も含めて、有明海からの外国の軍隊の侵入に備えたものだという、そういう説もかねてより唱えられています。私は、これは少なくとも唐の侵略に際しては、当たらないと思うのです。なぜならば、百済を攻めたときには、大規模な艦隊を編成して百済に渡海したのです。艦船も大型のものだったと考えられています。そういう大型船の喫水線はかなり深いものだと思います。それが有明海の岸辺に着岸できるでしょうか。ムツゴロウが沖合い何キロにもわたって飛び跳ねるような、そういう有明海に唐の水軍の大型艦船が何百艘も着岸できるかという、それはかなり現実性に乏しいと考えなければならぬでしょう。

唐軍が有明海から侵入してくるとすれば、日本側は海岸線に軍隊を配置して、敵軍が一生懸命泥沼を渡っているときに攻撃すればいいのですから、唐軍がそういう愚策をとると思えません。つまり、有明海からの侵入に対する防衛という、そういう考え方は、少なくとも唐の大軍を対象にしたときにはやめたほうがいい。ですから、常識的に考えて、軍略というものを考えて、国防というものを考えて、どうなのかということ。繰り返しになりますけれども、そういう観点から、もう一度見直してみるのも必要ではないかと思っています。

佐藤…

大型の軍艦がたくさん来られるかという点は、私も少し問題かなと思うのですが、ただ、対外的な、例えば渤海の遣唐使が貞観一五（八七三）年に肥後国に漂着していますよね。それを、はじめは新羅

の海賊ではないかと疑っている。だから、海賊ともいいますが、対外的な交流は、私はあってもいいかなと思っています。それが大軍の軍船かどうかというのは、また別かもしれませんが。その点はいかがでしょうか、榎本さん。有明海の対外的な交流の在り方みたいなことは、古代史学のほうで考えられるのではないのでしょうか。

さかのぼると、火の君だとか、日羅といった肥後の豪族が半島との交渉に非常に大きな役割を果たしたりしておりますし、有名な江田船山古墳の被葬者は恐らく百済と直接的に交流して、さまざまな文物を得ているということが考古学的にいわれていると思うのですが。それを前提として榎本さん、いかがでしょうか。

榎本..

おっしゃるように、肥後の地域は日本海沿岸に面してはいないのですが、早くからやはり朝鮮半島との交流が密接に行われていた地域だと思います。佐藤さんが挙げられた例もありますけれども、熊本の本の南に浄水寺というお寺があり、浄水寺碑という、九世紀の石碑があるのですが、地方のお寺にも関わらず、漢籍とか仏典が数千巻存在しているということが石碑に書かれているわけでして、当時漢籍とか仏典とかというのは大変貴重品なわけですし、都とか、大宰府とか、そういう中心的な場所にはある程度あるのですけれども、肥後の南のほうの一地方の寺院であるにも関わらず、かなりたくさん漢籍・仏典を持っているというのは、これはかなり文化的には開けている地域で、先進的な文化

が早くから入ってきた地域ではないかなと思っています。

それ以外にも前回、前々回のシンポジウムで講演された先生方がいろいろと例を挙げられているように、渤海の遣唐船が漂着したりとか、いろいろとそういう半島との交流を示すような記事が古くから存在しておりまして、肥後はそういう意味できわめて開明的な土地だったのではないかと思っています。

井上..

ただし、ここで留意しておかなければならないのは、平時と戦時と全く別の状況であるということでしょう。この場合は戦争を前提にしたことがらなのです。人と人が殺し合うのです。いかに効率的に敵を壊滅するかという、そういうぎりぎりの局面でどう判断するかということなのです。やはり軍略、軍事的な視点というのがこの際には、最も重要視されなければならないと思います。

佐藤..

そうですね。一般的な交流と軍事とはやはり少しは違うと考えていいかなと、私も思います。

その平安時代のことに関しては、本日榎本さんからは、鞠智城の兵庫の鼓が鳴ったということについての評価で、だんだんと菊池郡の管理下に菊池城院というものが置かれるようになったのではないかというお話がありました。私は、大野城・基肄城・鞠智城と、松川さんがお話になった大宰府から出土した木簡の中に、基肄城にストックしてある大量の米穀を、筑前国や筑後国そして肥前・肥後が

入る「肥国」の人々が飢饉で困つているときに配るんだということで、大宰府の官僚である大監という、大宰府の役人が派遣されている。つまり、基肄城を管理しているのは、肥前国でも筑前国でもなく大宰府ですよ。だから、基肄城にストックしてある米穀の処分権は大宰府が直接握っていた。それを考えると、城といってももう軍事的な機能よりは、もしかしたら備蓄の機能のほうが強いかもしれません。

それから、松川さんのお話の中でも、大野城に府のクラと併せて城のクラというのがあるということ、大宰府の管理下にあるのではないかということがありました。

鞠智城についてはどうかというと、築城当初、私は大宰府があれば、国家的な築造としていいのかなと思うのです。ただし、その後、やはり城を維持していくためには肥後国だとか、あるいは、地元菊池郡が当然深く関与していた。「秦人忍□五斗」の荷札木簡が出ているということは、一俵分の米俵に付けた荷札だと思うのですが、それは菊池郡の人で、書き出しに筑後国とか菊池郡とか書かずに「はたひとのおし□」という名前があることからすると、それは、菊池郡内の「はたひとのながし」が鞠智城に米を納めているということが分かる。八世紀半ばぐらいの木簡だと思いますが、当然菊池郡も関係した。肥後国も、もし鞠智城の防衛等に兵士が関係するとすれば、兵士の管轄は郡司ではなくて国司です。肥後国司が関与したのは間違いないですし、それから、大宰府も関係してくる可能性があると思います。私は、それが時代によって変化することがあるのかなと思つていますが。

そこまで考えた上で榎本さん、どうでしょうか。鞠智城の兵庫の鼓が鳴ったというのも、おそらく最初に本曰おっしゃったように、たくさんの方がまだ鞠智城に詰めていたので分かったわけですけども、それを都に、政府に伝えるためには、まず肥後国司に通知し、肥後国司が大宰府に通知してから中央の政府に言上されて、それが『三代実録』などに載ると思うのですが、その辺りはどうでしょうか。もう菊池城院というのはもう完全に郡だけででしょうか。その点がちょっと気になったのですが。

榎本..

明確な資料がないのであくまでも推測によるところが多いのですが、やはり遺構が八世紀の後半で一応途切れている。土器がなくなつて、あまり活甕に使用されなくなるといふ形で、この段階でかなり性格が変わつていったのではないか。建物の配置とかも変わつていって、それまでの管理棟的な建物がなくなり、それまでの持つていた性格が一変するような変化が八世紀の後半、末ころにあつたわけです、それまでの大宰府と結びついてた機能というのが、ある意味でそこできなくなつていったのではないかというのが、私の捉え方です。

もし、鞠智城にそういう機能が、大宰府との管轄の機能がずっと続いているというのであれば、なぜ基肆城のそういう機能はなくなっているか。なぜ存続しなかったのかとか、そういう説明がつかなくなるのではないかなというふうに考えています。

佐藤..

それから、鼓が鳴ることの意味については、鼓は何のための鼓か。これは、かつて多少議論したと思うのですが、納まっている兵庫というのは具体的にはどういう倉庫なのかという点について、松川さん、いかがでしょうか。

松川..

兵庫の中に納められている物というのは、大野城の場合ですと具体的に「器仗」という形で出てきます。実際、大野城に納められた物は、器仗の中でも実践に使われる物であったらうと考えられます。その中の鼓ですけれども、恐らくは兵を動かす際の号令に使用した物ではないのかと考えています。さらにその四天王寺が大野城にできる場所が「鼓峯」という、また、そこでも山城と結びついて、鼓という地名が残っておりますので、そういった兵器の中でも何か軍事を象徴するようなものだったのではないかと考えております。

佐藤..

鼓があった兵庫については、今日現地では鼓楼として復元していますが、兵庫の中に納まっているとしたら、兵庫はあまりああいいう楼風の建物にはならないのではないかというのが、少し疑問点としてあるのですが、いかがですか。

松川..

武器庫ということであれば、いわゆる一層だけの建物でも兵庫としての役割を担っていたと思います。

す。例えば時を知らせるとか、あるいは、非常を伝える。敵が攻めて来たとか、そういったものを知らせるための大きな太鼓を置くとか、そういったものであれば、鼓楼といった構造のものという可能性もあるのかもしれませんが。兵庫の実態というのはなかなか発掘でも、これは明らかに兵庫だとかっている建物跡というのは私も分からないので、何ともいえません。

佐藤..

実際に兵庫が発掘された事例はないですね。そういったこともまだまだ検討の課題があるということなのですが、時間が迫ってまいりましたので、まとめに入りたいと思います。本日のさまざまなご意見も踏まえた上で、鞠智城についてさらにこれから調査したり、研究したりする際に、どのような課題があるかということ。あるいは、今回のご講演・報告をまとめていただいた際に、まだこういう点が、突っ込んで研究できるのではないかという点があるかと思えます。井上さんから願います。

井上..

私は奈良の平城京や、藤原京、飛鳥だけではなくて、朝鮮半島の都城遺跡、あるいはベトナムの都城遺跡での発掘調査に四〇年間ほど携わってきました。ですから、鞠智城の発掘調査の大変さ、半世紀続けてきているということの意義の大きさは、しみじみわかります。これに対して、一般的にいいまして、山城の調査は、鞠智城以外の山城では、あまり進んでいません。本日紹介した岡山県総社市

の鬼ノ城、あるいは、福岡県の大野城など、非常に限られた山城でしか、細々とした形でしか発掘調査が進んでいない。ですから、発掘調査、考古学的ないろいろな知見というのは、まだまだ限られているというのが現実だと思うのです。

そういった中で、鞠智城では様々な情報が得られている。ですから、逆に鞠智城のさまざまな情報を基にして、他の山城の調査の方針を立てたり、どういう点に注目して調査すればいいかということが示唆できるような、そういう豊かな成果を鞠智城は持っていると思います。そういった中で、私よりも深く知りたいことの一つは、「丘陵型」と「山岳型」山城の関係についてです。明らかに形式が違います。あるいは、石の積み方も非常に典型的な部分で違っている、それが幾つかの系統に分かれることも予測されています。

そういう視点からの研究はこれまでも随分なされているのですが、もう一度原点に戻って、例えば水門というような遺構があります。その構造的なもの、もちろんこれらを明らかにするには朝鮮半島の何百、何千という山城の実態を解明しないことには充分答えは得られないだろうことも事実ですが、日本側の山城を丹念に調査することによって、逆に朝鮮半島の実態が秩序立って理解できるかもしれない。そういう重要な基点に立っているのが鞠智城だと思うのです。

いろいろな困難な状況はあるでしょうが、水門の位置を確認し、門の位置を確認して、あるいは、城壁の構造を明らかにする。そういう調査をぜひ地道に、継続的に進めていく。これが日本の古代山

城だけではなくて日本の古代史、ひいてはまさに東アジアの世界史、古代史を解明する上で、非常に重要なポイントとなってくるといように私は確信しています。これからのいっそうのご尽力とご健闘を祈念しています。

榎本・・

本日発表でも申し上げたのですが、鞠智城はかなり変わった山城です。その特殊性の由来するところは何なのかということを、さらに研究していく必要があるのではないかと思います。これまでも韓国などの、モデルとなった山城の調査とか、比較とかも行われていると思いますが、かつて岡田先生が東北の城柵との関連性とかも発表されましたけれども、いろいろなタイプの城や城柵とかと比較しながら、鞠智城の特殊性の由来、意味というものを検討していく必要があるのではないかと思います。

それからもう一つ、その九世紀以降、備蓄機能を強化する形で鞠智城が存続したということなのですが、なぜ普通の一般の郡の正倉ではなく、防備機能が比較的高い鞠智城の中にそういう貯蓄施設を設ける必要があったのかということ、これはその当時の九世紀の在地社会の動向と併せて考えていく必要があるのではないかと思います。

どうもありがとうございました。

松川 ..

私のお話の中で兵庫のお話と併せてお話をさせていただきましたが、神仏への祈りということです。

これについて、東北においては秋田城にも四天王寺が置かれて、それを継承するものではないかというところで、古四王神社というお宮が秋田城の近くにあったり、あるいは、基肄城があった城山についても、寺院があったことを示すような地名が残っていたりということもありますし、また、讃岐の城山ですけれども、城山の神という形でその後祀られたりという形がありますので、鞠智城にそういった外敵に対する宗教的な施設というものが、あった可能性もあるのではないだろうか。それはあるときから山頂や山内ではなくて、山を下りて移設されることもあるということもありますので、そういった視点というのも、今後、鞠智城を考えていく上では重要ではないかと思っています。

今回の私の発表は大野城・基肄城・鞠智城という、それぞれの山城が持っている情報を補完しながら、古代の山城というものがどういうものかというお話をさせていただきました。本日のご報告やご講演の中で、むしろ鞠智城の特殊性というのをどう理解していくかという視点で、私のほうも今後研究をしていく必要があるということを痛感しているところでございます。

西住 ..

本日三名の先生方からご講演いただき、いろいろな今後に向けての課題を頂戴したわけですが、まさしく私どもがいつも現場で感じているようなことがあります。今後、やはりこれをいかに一つ一つ継続して解決していくかというのが、私たちの使命ではないかなというふうに考えていると

ことです。

それで非常にうれしかったのは、先生たちのご講演の中で鞠智城の研究が進んでいて、それが日本の古代山城研究のベースになっているということをお聞きしまして、やる気ますます出てきているところでございます。本当に本日は良かったなというふうに私は考えています。

最近、前畑遺跡というところで、あたかも大宰府を守るような形で、版築土塁がみつかりました。大野城・基肄城があつて、大宰府政庁があつて、その南東側のところに前畑遺跡があります。本日の井上さんのお話の、そこを防衛するのは大事だけでも、ただ、それが大宰府をどうかするというのは少し置いておきまして、非常に大きな意味でその大宰府周辺の外側に防衛ラインといいますが、そういうものが出てきているということです。

実は鞠智城の研究をされていた、この説を出された鑑山先生も、鞠智城には外縁地区があるということをおっしゃっています、それも含めて、こういうのが見つかった以上、確認をしていくのも今後の課題かなというふうに考えています。

佐藤..

鞠智城も、現在分かっている外郭線よりももっと広く、北側に相当広範囲に伸びる形で土塁が巡っているという知見がかつて提示されていたということです。今回前畑遺跡が見つかったということですから、鞠智城にとつても、防衛ラインのあり方は研究テーマとしてあるということになると

思います。

先ほど井上さんがまとめてくださったのですが、これまでの鞠智城の調査研究を長いこと努力してきていただいたその成果と、それをこれまでもこういうシンポジウムのような形で深めていただいていたことが前提となつて、今日の全国の古代山城研究をリードしているのが鞠智城といつてよいかなと、私も思っています。

しかしながら、まだまだ鞠智城に関してすら、調査も足りない、研究も足りないような面があるということだと私は思います。あるいは、新しい視点で見ると、本日もいろいろな新しい視点を先生方に提示していただいたわけですが、そうすると見えてくるものがまた違って来て、これまでの遺構の解釈、遺跡の解釈が変わって来るようなこともあるということです。これからもなお検討課題がいっぱいあり、かつ、私たちとしてはいろいろな見方で研究ができるし、また、それを楽しむことができるということだと思います。

熊本県教育委員会では、これまでもこういうシンポジウムをされる一方、若手の研究者に研究助成をして、鞠智城についての新しい視点からの研究を進めていただいているということがあります。これも、これからどんどん進めていただければと思います。

またさらに、明治大学博物館における東日本大震災の展示で感じることも多くありましたが、本日一階のエントランスホールで熊本城の被災状況などの展示をしていますように、熊本は今回の大地震

で大きな被災がありました。そういった状況からの復興は大変だと思いますが、それと同時に、このシンポジウムでとりあげたような歴史と文化について、それを活かした形での復興ということもぜひお考えいただいて、被災にめぐることなく頑張っていたきたいというように思っています。

それでは、皆さん、どうもありがとうございました。